嶋田さんを偲ぶ綴り

たくさんのありがとう

2021.2　嶋田さんを偲ぶ会

巻頭の言葉

岡村幸二

2021 年は、私たちにとって忘れられない年明けとなりました。それでなくても、新型コロナウイルスの霧がまだ晴れず、世界中が大変な苦難を強いられているときに、悲しいお知らせが一月早々にやってきました。建築家の嶋田勝志様が 1 月 2 日に永遠に旅立たれたのです。まだ 7 7 歳という若さでしたので、本当に残念でなりません。

1 月の夜にご子息の耕介氏より電話をいただいた内容は、嶋田さんは数年前に癌をわずらったものの前向きに闘病生活を続けていましたが、昨年 12 月になって聖路加病院に再入院し、年が明けてすぐに帰らぬ人となりました。これまで数多くの豊かな思い出をいただいた私たちを代表して、心よりご冥福をお祈りいたします。どうぞ安らかにお眠りください。

建築家の嶋田さんのご経歴について詳しくは存じ上げませんが、生粋の関西人である嶋田さんが、建築家としての自立を目指して東京に出てきて、我が師匠として尊敬する鈴木恂(まこと)氏の建築事務所で自己研鑽を積み、その後人生の良きパートナーでもある建築家の奥様とともに、嶋田・宮城設計事務所を立ち上げ、数多くの作品を世に生み出してきました。

2011.1.8　自由学園明日館にて

大きな転機となったのは、東京学芸大学で環境デザインを教えている伊藤清忠先生との出会いから、建築、土木、プロダクトの各デザイン専門チームの 1 人として、美術系大学の非常勤講師としての活躍の場を得たことであろうと思います。この非常勤講師時代に、若い学生たちとデザイン論・建築論に関する濃密な時間を積み上げて、数多くの有能な人材を社会に送りだしていただいたと思います。強い信頼関係で結ばれた嶋田さんの講義やゼミは学生たちにかけがえのない時間となったことでしょう。

この度、松井先生や藤原さんのお力添えで、また東京学芸大卒業生の熱い思いを受けて、「嶋田さんを偲ぶ綴り」を小冊子にとりまとめました。

嶋田さん、これまで数多くの思い出と貴重な時間をありがとうございました。

私たちは嶋田さんの個性と魅力あふれる人間性を忘れません。

どうぞこれからも私たちを見守っていてください。

嶋田さんの略歴

（本人談：ご子息の耕介さんの記憶より）

・昭和１８年大阪寝屋川市生まれ
・高校で生徒会長になる
・高校 2 年生で清水建設設計部に入り悪い影響を受ける
・鈴木事務所に就職、鈴木の計らいにより宮城（母）と一緒に九州の現場を担当させられる
・独立したのは 1980 年頃じゃないかと思います。
・1994 年東京学芸大学　非常勤講師（プロダクト・環境デザイン研究室）
・2021.1　永眠（享年 77 歳）

思い出シート

＜投稿者＞
荒木(池ノ内)裕子
飯田哲徳
歌代(八重樫)幾世子
呉(西山)奈美子
岡村幸二
柿谷(齋藤)美保子
唐澤太郎
黒澤茂樹
小林直弘
鉄矢悦朗
西崎　将
樋口貴彦
平尾清香
藤田(唐澤)彩
藤原正明
松井幹雄
水城大雄
美濃部順一郎
渡辺貴宜
※あいうえお順

思い出シート

学芸大の卒業後にお会いした際に、もう先生と呼ばないでよ、社会人同士なのだからとおっしゃって頂いたのですが、結局未だに嶋田さんとお呼びするのには違和感があります、嶋田さん

今回の訃報をお聞きし、あぁ、もっとお会いしておくべきだったっと後悔したことは言うまでもありません。その一方で自分の置かれている状況が変わる度にお会いしてお話しできたこと、本当に貴重な機会だったのだと思い知らされます。

沖縄で建築設計をしている頃、東京に行く際にお会いすることは、外の世界と繋がり続けるという意味もあったように思います。防災の世界に入ってからは、東日本大震災で現地に常駐していることを知って、わざわざ厳冬の気仙沼までいらして下さいました。
あのとき、仮設店舗だったあさひ寿司さんは南町で再建されてますよ、嶋田さん。行かなくていいんですか？

名古屋で仕事をするようになってからも２度ほどお会いしました。奥様が名古屋大学のご出身で、その縁で名古屋でもお仕事されていたこと、今のお仕事、お孫さんのことなどなど。
私より嶋田さんのほうが名古屋についてはお詳しくて、ただぶらぶら歩くだけでも楽しかったのです。次は何を食べようかと話していたのに、もうその機会はないんでしょうか。

引っ越し続きだったので写真は一枚も手元にありません。あー、気仙沼でも名古屋でも撮っておけばよかったです、でもお会いできなくなるなんて考えていなかったので。こんな風にかっこよく去ってしまって、しめしめ、なんて思ってないですよね？嶋田さん

記入者：96 年入学　荒木(池ノ内)裕子　名古屋大学

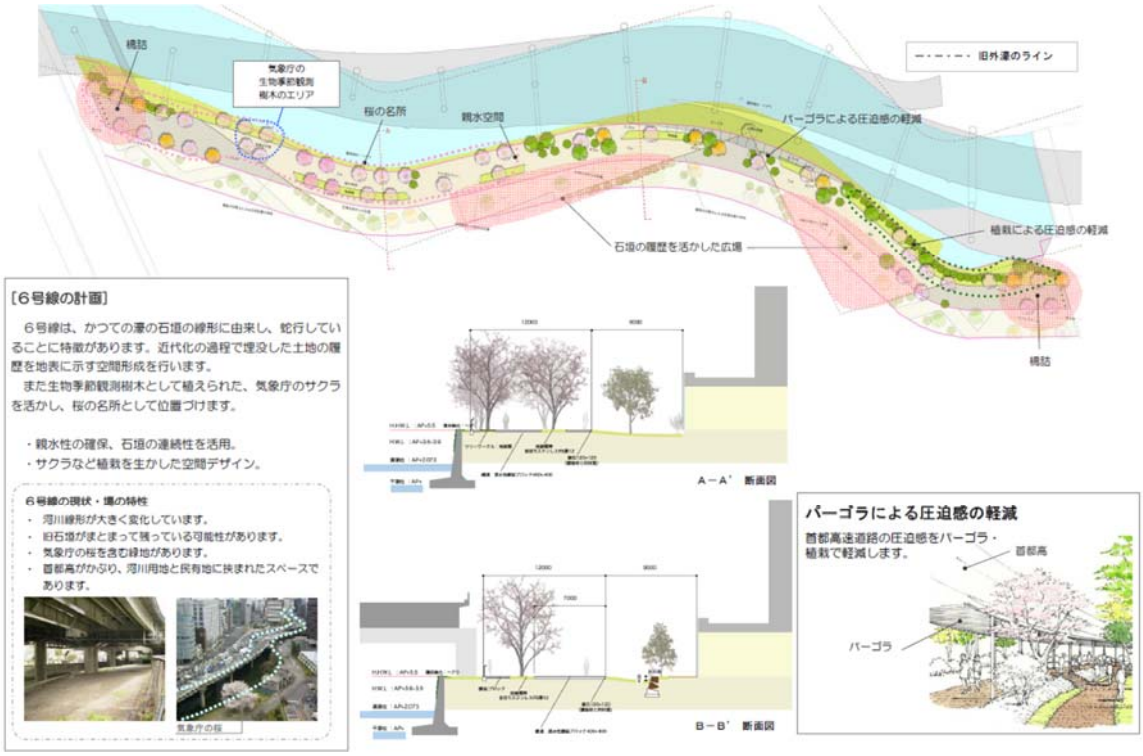
思い出シート

私が嶋田さんにお会いしたのは、社会人となって３年目、河川部から異動してきて、都市の仕事もままならない頃、大手町地区の歩行者専用道のプロジェクトでご一緒させていただきました。日本橋川の歴史を掘り出し、現在の首都高高架下という特性に合わせて、デザイン提案したものでした。嶋田さんの土木の枠にはまらないアプローチは新鮮で、プロポーザル段階ではデッキを置くことによって、解決しようと試みたものでした。その後の発注者とのやり取りで悔しい思いをしながらも、嶋田さんとデザインについて議論する場にいれたことは貴重なことだったと思います。（実施設計につなげられなかったのが残念でなりませんが。）

その後も、まちあるきでご一緒させていただき、嶋田さんと岡村さんの掛け合いがあってこそのもので、子どものような心を持った二人の意見交換はストレートで、その場の空間を理解するのに新しい気づきをいただいたものでした。

今、振り返ってみれば、都市デザインの学生上がりの私にとって、あの時期がかけがえのない財産になっていると思います。あれから１０年の月日が流れ、年を重ねるにつれ、ビジネスの場にあのような発想を持ち込み、また、デザインを議論する場をつくるのがどれだけ大変かを感じている次第ですが、一つずつ積み重ねていきたいと思います。

謹んでご冥福をお祈りいたします。



嶋田さんとともに取り組んだプロジェクト（日本橋川大手町地区歩行者専用道デザイン）

記入者：飯田哲徳　株式会社建設技術研究所

思い出シート

それはいつものように始まった建築の授業でしたが、嶋田先生は急に言葉をつまらせ、私たち学生に背を向けるように後ろを向いてしまったことがありました。嶋田先生が泣いているとわかった私たちは驚き、でもただ静かに待つしかできませんでした。少しすると嶋田先生は涙を拭きながら振り返り、大学へ来る前に恩師（だったと思います）と会っていたこと、その方に「お前たちはゴミをつくっているのか」と言われとても悔しく悲しかったことを話してくださいました。授業はその後またいつものように進みましたが、なんの授業だったか思い出せないほど、私はこの出来事がとても印象的でした。

嶋田先生はいつもお茶目な笑顔と鋭いツッコミで私たち学生と接してくださり、時に物事を真剣にはっきりと伝えてくださいました。嶋田先生が涙した出来事は、嶋田先生のこのようなまっすぐなお人柄と、お仕事に対する強い思いゆえと思っていましたが、この思い出シートで松井先生が「全く別の視点で」「日本の文化として」嶋田先生は物事を捉えていたと書かれたのを拝見し、当時の嶋田先生の悔しさがやっと理解できたように思いました。

「日本の文化として」という点では、朝日新聞の記事も記憶に残っています。嶋田先生の視座の広さと深さ、そして発信する力を、今あらためて感じています。

今回ご連絡くださったOBの方々が「実は嶋田先生の授業は受けたことないんだ」とお話した時には、え!? と大声で驚いてしまいました。授業を超えた繋がりに、また嶋田先生のお人柄を感じました。もう一度お会いしたかったことは悔やんでも悔やみきれませんが、嶋田先生の講義を受けられたこと、卒業後もお話できたことを誇りに思い、教えを財産として大切に、先生の笑顔を思い出し、私も様々な物事と向き合っていきたいと思います。
嶋田先生、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

研修旅行ではもちろん、教室でも、
いつも風をまとったように格好いい嶋田先生

1998年(平成10年) 5月7日 木曜日 13版 主張・解説 4

論壇

嶋田 勝志

土木デザインにも著作権を

主張・解説

1998.5.7
朝日新聞「論壇」

伊藤清忠教授最終講義にて
緊張のツーショット

記入者：98年入学　歌代(八重樫)幾世子　環境・プロダクトデザイン研究室OG

思い出シート

嶋田先生に初めてお会いした時は、とにかく、おしゃれな先生！という印象でした。最初の授業は、「皆さん、最近ときめいていますか？」とお話を始められたと記憶しています。どちらかというと地味な学芸大の授業にしては少々眩しい出会いでした。しかし、お優しい関西弁と先生の気さくなお人柄によって、お話がすっと頭に入ってきて、こちらからも色々な相談事がしやすかったことが思い出されます。

授業終わりに、今日のネクタイ特に素敵ですね！という私に「そんなとこ見てないで、ちゃんと授業きいてね」。。。有名建築の模写の課題で、その建築に対する私の文章を評して、「自分の作品も同じくらいの熱量で語れるようになろうね」。。。などなど、先生にとっては物足りない学生だったと思いますが、先生の言葉に救われた思い出をいくつか。

３年、あるいは４年次だったかもしれませんが、進路・将来・現在・もろもろ・・・いろいろなことに迷い、精神的にもちょっときつくなっていた時、飲み会の席で先生に「〇〇がやってみたいんですがね、、、」とふともらしたところ、「じゃあ、やったらいいんだよ、やりたいことをやったらいいんだよ」と、なんの迷いもなくまっすぐな言葉を掛けてくださったこと。卒業後、ふらふらと就職もせず実家に引きこもっている時に OG として参加した研修旅行で「今は主に消費活動だけしています」と卑下していう私に、「消費も立派な社会活動ですよ」と優しく律してくださったこと。何気ない言葉ですが、おおらかに何事も受け止めつつ、筋の通った先生から発せられた言葉に、幾度となくハッとされられ、その後の生活にも少なからず影響を受けました。

もう一つ、嶋田先生といえば思い出されるのが、お酒に対する真摯な姿勢です。学生主催の教室での懇親会であっても、午前中から体調と食べ物に気を付けて万全の態勢で出席されていました。本当に楽しそうにお酒を飲むお姿がいまも目に浮かびます。

今はゆっくりとお酒を楽しまれているでしょうか。

嶋田先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

1998.3
卒業記念・謝恩会にて

記入者：94 年入学　呉(西山)奈美子　兵庫県まちづくり技術センター

思い出シート

―― 土木デザインへの熱い思い ――

嶋田さんに 3 年ほど前にメールで、「胃を手術してお酒をたくさん飲めないので弱った」と残念がっていました。それまでは、嶋田さんとの打合せや現場に行ったあとに「一杯やりますか」というのがお互いにうれしく、毎回楽しい思い出だったのですが。

私が最初に嶋田さんとお会いしたのは、伊藤清忠先生のはからいで、静岡県大井川の上流、長島ダム景観デザインのプロジェクトでご一緒した時でした。伊藤先生は、建築家の嶋田さんに長島ダム管理棟ほかのデザインを依頼し、嶋田さんはまるでコンペに臨むようにダム直下の傾斜地を活かした斬新な建築物のスタディ模型をつくってベストの提案をしていただきました。残念ながら、発注者のダム事務所からは「場所、機能、予算」の条件を厳しく制限されたため、実現には至りませんでした。「どうして最初に条件を言ってくれないのかね」と嶋田さんは残念がっていました。

建築家の嶋田さんではありますが、スケールの大きい土木のインフラづくりには特別に魅力を感じていて、構造的な安定だけに力を注ぎ、デザインの方はおざなりとなっている土木施設に対して、「僕だったら、こんな風にしたいのだけどな」と夢を描いてくれました。そんなときの嶋田さんは本当に楽しそうでした。

忘れられない思い出となったのは、2009 年から 3 年間、嶋田さんを講師にして 15 回ほど連続で行った「建築・街並みサーベイ」のことです。日生劇場、新高輪プリンスホテル、東京カテドラル教会、コルゲートハウス、横浜みなとみらい、東京文化会館、東京都美術館、鎌倉近代美術館、いらか道・世田谷美術館、原宿・表参道、目黒・白金台、自由学園、江戸東京たてもの園、東京江戸博物館、桜台(内井昭蔵)、吉田五十八邸、代官山(槙文彦)、ヤマトインターナショナル原広司・・・これら現地の作品を見ながら嶋田さんの分析、深い見識を聞くことができたのは我々に大きな財産となりました。

学生・卒業生の中での嶋田さんの人気は大変なもので、どんな問題に対しても自分の意見をストレートに表明することができる嶋田さんは、学生たちにとっても人間的な魅力をいっぱい感じたことでしょう。

嶋田さんの公共土木に対する主張は非常に明確で、以前朝日新聞への投稿「土木デザインにも著作権を」でも伺うことができます。

――「木の現場を眺めてみると、巨大プロジェクトの場合は、エンジニア主導でそれなりの成果があがっている例もある。（中略）最も人材が必要とされるのは、歩く人間の目に近い、中型から小型のプロジェクトだ。好みや趣味による素人判断や、脈略を無視された専門のデザイナーの不在が招いた結果だ。」

（朝日新聞：論壇 1998.5.7）

嶋田さん、やすらかにお眠りください。

日生劇場見学会：ロビーの階段で嶋田さん

用賀・いらか道を楽しそうに歩く嶋田さん

記入者：岡村幸二　株式会社建設技術研究所

思い出シート

嶋田先生の思い出として印象に残っているのは、卒業間際に設計事務所の方へ伺った時のことです。私は富山県出身でしたので、富山で生活したいとご相談すると、嶋田先生のご友人の中で富山とゆかりのある方をご紹介してくださいました。まだ将来のことが漠然として不安だった時期に私の話を聞いていただき、何の根拠もないのですがただただ安心したことを覚えています。

また、その際に趣味というか、１日１回書道をすることで精神を集中し気分転換をしているという書道道具が置いてある場所を見せていただきました。私も子供のころ書道をしていた経験からか、単純に「あ、いいな。私もやってみたいな。」と思いました。結局、書道はしていませんが気分転換という意味では、パッチワークキルトをしています。一針一針ひたすら縫うだけの手作業です。私にとっては仕事とは一切無関係で、自分の為だけに時間を使える贅沢なひとときです。あの時に、時間の使い方を学ばせていただいたのだと思います。

最後に今となっては、とても素晴らしいお話だったとしみじみ思うのですが、何かの話の流れで「私は、妻が出産育児であまり仕事ができない時期に、私ひとりでやった仕事でも必ず『嶋田宮城』と妻の名前も書き、いつでもスムーズに仕事に復帰できるようにしていました。」と。奥様に対する深い愛情を感じました。このような愛のある政策・システムがあれば、みな結婚出産を気にせず仕事ができ、少子化対策になるのではないでしょうか。

心優しい嶋田先生、ご冥福をお祈り申し上げます。

写真は２５年前、ちょうど嶋田先生が赴任された頃です。大学３～４年生でした。

平成６年度（1994 年度）　プロダクト・環境デザイン研究室　歓送迎会

1995.夏　プロダクト・環境デザイン研究室
研修旅行（茨城方面）

記入者：柿谷(齋藤)美保子　㈱景観デザイン Leaf's/KAKI OFFICE/職藝学院非常勤講師

思い出シート

嶋田勝志様のご訃報に接し、在りし日のお姿を偲びつつ、謹んで哀悼の意を表します。

1992 年、私は伊藤清忠先生にご指導いただきながら、静岡県、長島ダムの景観デザインの仕事に携わっていました。ダム管理事務所の意匠設計にあたり、伊藤先生が全幅の信頼を寄せる建築家としてお会いしたのが嶋田さんでした。

長島ダム管理事務所

ダム堤体をモチーフとした御影石の重厚な列柱と、ダムから流れ落ちる水を連想させるガラス面。嶋田さんが提案した管理事務所は、それまでの庁舎建築のイメージにはない斬新な造形でした。

その後、嶋田さんの基本計画と数年間にわたるデザイン照査を経て完成したのが長島ダム管理事務所です。

1995 年、長島ダム下流近傍の傾斜地に露天風呂を備えた記念館の構想を練っていました。嶋田さんとこの施設計画について協議した時のことです。嶋田さんが自ら設計した施設配置図について、身振り手振りを交えて語り始めたのです。

「この露天風呂につかって見上げると、空とダムがスーッと見えてね。ダムのテッペンから露天風呂のほう眺めると、湯けむりがモクッモクッとしてね。いいよーこれできたらー。女性が安心て入れるように、女風呂は男風呂より斜面の高い位置にしてね。　エッ？ダムのテッペンから覗かれないかって？…　エーー見えないよー、とぉーいモン　えへへ。」

この記念館の構想は幻となりましたが、露天の湯けむりと嶋田さんの笑顔は、私の楽しい記憶です。嶋田さん、安らかな旅立ちでありますよう、心からお祈りいたします。

2009 年夏
嶋田さんと、建築見学をした思い出の写真

文京区音羽「鳩山会館」

サンルームで嶋田さんと

文京区関口「東京カテドラル聖マリア大聖堂」

オルガンの下で建物の解説をする嶋田さん

記入者：唐澤太郎　株式会社建設技術研究所

思い出シート

嶋田先生との出会いは学芸大の伊藤清忠先生の研究室に所属したことで始まりました。大学の先生方とはちょっと違う雰囲気と話し方（京都弁？大阪弁？）、そして時折授業や会話の中で出てくる「こんちくしょー」がとても印象的でした。学生時代は笑い話程度にしか認識していなかった話も今思えば「こんちくしょー」が出てくるときはご自身の経験の中で理不尽な実社会の経験であったり、失敗談であったりを通してその時に気づいた乗り越えるべき課題を伝えていただいていたのかなと思ったりします。また、数少ないコマ数の授業であったにも関わらず、先生の実際の作品を見学したり、その家でそのまま飲み会をしていただいたりと内容の濃い！？授業だったことも懐かしいです。

そして課題では気づいてもらえないかなーと思いながら作った模型の細部をちゃんと指摘してもらえたり、少しでも楽をしようと手を抜いている部分は模型でも図面でも必ず注意されたこと、「面白いねー」「よく考えてるねー」と言われながらも最後には「でも自分だったら住みたくないなー（狭小住宅の課題）」、「でも先生の意図は違います。（光が丘ペントハウスの模型課題）」「でもこんな設定の環境はなかなかないよね。（ウォーターフロント？）」などなどのコメントで毎回凹まされ、またそれを思い出しては次の課題に奮起したことを思い出します。学生時代に最後のコメントを貰わずに済むことはありませんでしたが、卒業の時に「建築を本気でするなら」と声をかけていただいたことが本当に嬉しかったことを今でも覚えています。

先生の事務所見学の後に行った飲み会で初めて飲んだ焼酎の梅割り、今でもそんなことを思い出しながらたまに飲んでいます。今は自分でも「こんちくしょー」と思うことが増えてきました。先生からしてみたら、まだまだばかりのことだらけ、今回のことで改めて学生時代の奮起思い起こしがんばります！嶋田先生に出会えたことに感謝し、謹んでご冥福をお祈りします。

出版記念祝賀会・２次会の一コマ
写真はいつも撮る側なので一緒に
写っているものがなく。。。

記入者：98 年入学　黒澤茂樹　黒澤茂樹デザイン事務所・九州大学病院

思い出シート

2001 年に東京学芸大学に入学し、立体デザインを学ぶため、環境プロダクト研究室に入りました。2 年間の浪人生を過ごしたうえで入学したことで、友人たちは他大学で建築の勉強を始めており、また人学年上にも友人がいることで、建築を勉強したいという欲求が多かった気がします。その中で学部の 2 学年時に嶋田先生「建築デザイン？」を受講し、住宅設計の課題に取り組みました。

講義では、住宅設計を行った記憶があります（私が設計した受託はタイトル one room one garden でした）。建築の初学者であり、専門性のある専攻でない我々に物腰柔らかく建築のイロハを講義していただきました。当時格好いい大人を目の当たりにする機会がない、学生にとって嶋田先生はまさにあこがれる素敵な大人でした。研究室の飲み会や先生にお会いできる折には、自主的に行った学生コンペティションの案を見ていただき意見をいただき、その折に興味深く聞いていただいたことが励みになりました。

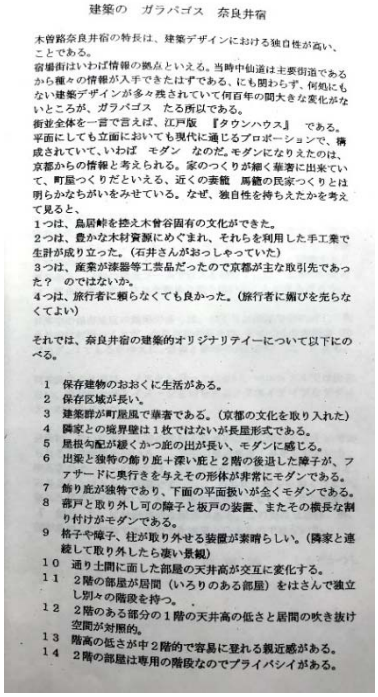
私の母校は建築学を専門としない大学でありましたが、運よく今は建築学に携わる仕事ができております。建築に触れる最初の機会は先生の講義でした本当にありがとうございます。先生のご冥福をお祈りします。我々の精進を見守りください。

記入者：01 年入学　小林直弘　東京芸術大学大学院・工学院大学・東京家政学院大学

思い出シート

私が伊藤清忠先生の後任として、東京学芸大学に着任し、建築デザインを担当している嶋田先生と出会いました。着任当時、自分が建築デザインを専門としていることもあり、この授業枠を自分でやりたいとの気持ちもありました。しかし、専門分野に２人がかかわれる環境であることを特徴的なものと考え、嶋田先生の建築デザインの授業の講評などを見学？参加したことを覚えております。そんな中で、まちやデザインを見る研修（限・デザイン文化研修）を行い、毎年続けてきたのも、このスタート時に、嶋田先生らの暖かな支えがあったからだと思っております。大谷石など北関東の研修の際には、急に腹痛となった学生と路線バスを下車したとき、他の学生を引率してくれたのは嶋田先生でしたね。バスの中で見た建築ビデオを痛烈に批判したり、私の選定した見学先が失敗だったことを暖かく「ダメだったね！」と言ってくれました。建築指導が私１人ではなく２人体制となっていた環境・プロダクトデザイン研究室にとっても稀有な期間でした。この専門分野が太くなっていた経験が、その後の非常勤講師に、野上竜一先生や北川卓先生など建築系の視点を持った方を担当していただいたことにつながります。

2002.8.3　奈良井にて　研修旅行～岡谷・楢川村周辺～の一コマ　そういえば研修でもこの服装でしたね

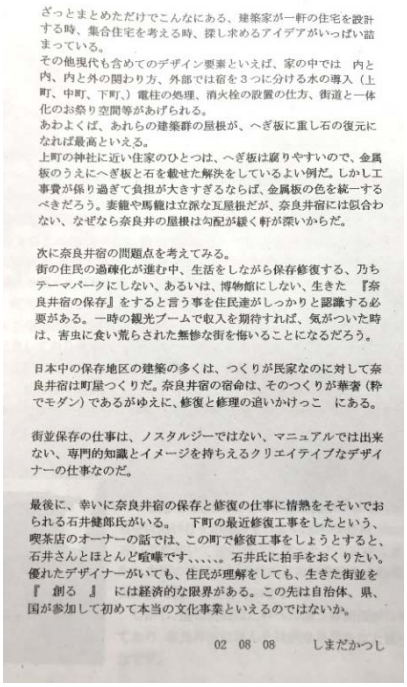


建築の　ガラパゴス　奈良井宿

木曾路奈良井宿の特長は、建築デザインにおける独自性が高い、ことである。
宿場街はいわば情報の拠点といえる。当時中仙道は主要街道であるから種々の情報が入手できたはずである。にも関わらず、何処にもない建築デザインが多々残されていて何百年の間大きな変化がないところが、ガラパゴス　たる所以である。
街並全体を一言で言えば、江戸版　『タウンハウス』　である。
平面にしても立面においても現代に通じるプロポーションで、構成されていて、いわば　モダン　なのだ。モダンになりえたのは、京都からの情報と考えられる。家のつくりが細く華奢に出来ていて、町屋つくりだといえる、近くの妻籠　馬籠の民家つくりとは明らかなちがいをみせている。なぜ、独自性を持ちえたかを考えて見ると、
１つは、鳥居峠を控え木曾谷固有の文化ができた。
２つは、豊かな木材資源にめぐまれ、それらを利用した手工業で生計が成り立った。（石井さんがおっしゃっていた）
３つは、産業が漆器等工芸品だったので京都が主な取引先であった？　のではないか。
４つは、旅行者に頼らなくても良かった。（旅行者に媚びを売らなくてよい）

それでは、奈良井宿の建築的オリジナリテイーについて以下にのべる。

１　保存建物のおおくに生活がある。
２　保存区域が長い。
３　建築群が町屋風で華奢である。（京都の文化を取り入れた）
４　隣家との境界壁は１枚ではないが長屋形式である。
５　屋根勾配が緩くかつ庇の出が長い、モダンに感じる。
６　出梁と独特の飾り庇＋深い庇と２階の後退した障子が、ファサードに奥行きを与えその形体が非常にモダンである。
７　飾り庇が独特であり、下面の平面扱いが全くモダンである。
８　雨戸と取り外し可の障子と板戸の装置、またその横長な割り付けがモダンである。
９　格子や障子、柱が取り外せる装置が素晴らしい。（隣家と連続して取り外したら凄い景観）
１０　通り土間に面した部屋の天井高が交互に変化する。
１１　２階の部屋が居間（いろりのある部屋）をはさんで独立し別々の階段を持つ。
１２　２階のある部分の１階の天井高の低さと居間の吹き抜け空間が対照的。
１３　階高の低さが中２階的で容易に登れる親近感がある。
１４　２階の部屋は専用の階段なのでプライバシイがある。



ざっとまとめただけでこんなにある、建築家が一軒の住宅を設計する時、集合住宅を考える時、探し求めるアイデアがいっぱい詰まっている。
その他現代も含めてのデザイン要素といえば、家の中では　内と内、内と外の関わり方、外部では宿を３つに分ける水の導入（上町、中町、下町.）電柱の処理、消火栓の設置の仕方、街道と一体化のお祭り空間等があげられる。
あわよくば、あれらの建築群の屋根が、へぎ板に重し石の復元になれば最高といえる。
上町の神社に近い住家のひとつは、へぎ板は腐りやすいので、金属板のうえにへぎ板と石を載せた解決をしているよい例だ。しかし工事費が係り過ぎて負担が大きすぎるならば、金属板の色を統一するべきだろう。妻籠や馬籠は立派な瓦屋根だが、奈良井宿には似合わない、なぜなら奈良井の屋根は勾配が緩く軒が深いからだ。

次に奈良井宿の問題点を考えてみる。
街の住民の過疎化が進む中、生活をしながら保存修復する、乃ちテーマパークにしない、あるいは、博物館にしない、生きた　『奈良井宿の保存』をすると言う事を住民達がしっかりと認識する必要がある。一時の観光ブームで収入を期待すれば、気がついた時は、害虫に食い荒らされた無惨な街を悔いることになるだろう。

日本中の保存地区の建築の多くは、つくりが民家なのに対して奈良井宿は町屋つくりだ。奈良井宿の宿命は、そのつくりが華奢（粋でモダン）であるがゆえに、修復と修理の追いかけっこ　にある。

街並保存の仕事は、ノスタルジーではない、マニュアルでは出来ない、専門的知識とイメージを持ちえるクリエイテイブなデザイナーの仕事なのだ。

最後に、幸いに奈良井宿の保存と修復の仕事に情熱をそそいでおられる石井健郎氏がいる。　下町の最近修復工事をしたという、喫茶店のオーナーの話では、この町で修復工事をしようとすると、石井さんとほとんど喧嘩です、、、、。石井氏に拍手をおくりたい。優れたデザイナーがいても、住民が理解をしても、生きた街並を『　創る　』　には経済的な限界がある。この先は自治体、県、国が参加して初めて本当の文化事業といえるのではないか。

02　08　08　　しまだかつし

嶋田先生とは、岡山真庭の蔵元辻本店の辻均一郎さんが共通の知り合いということで、大変盛り上がった思い出があります。いつも、辻本店「御前酒」「９NINE」などを前にすると嶋田先生を思い出します。きっとこれからも。合掌。

2002.8.3　研修旅行～岡谷・楢川村周辺～報告書より

記入者：鉄矢悦朗　東京学芸大学／特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所

思い出シート

嶋田先生とは、対面してきちんとお話しできなかったと思いますが、日生劇場を一緒に見学させていただいたことが記憶に残っています。

建築家・村野藤吾については、私の出生地である北九州市の八幡の図書館を通じ、なんとなくイメージはありました。ところが、日生劇場のホールに入れていただき、その豊饒な内部空間にいたく感動するとともに、村野藤吾あるいは日本のモダニズムを誤解していたのだと気づきました。

嶋田先生は、当時の新建築だったと思いますが、日生劇場の記事のモノクロコピーを用意していただき、事前レクチャーをしていただきました。その時に繰り返されていた「アコヤガイが・・・」のフレーズが頭にこびりついていました。当時の私には、建築と貝が結びつかず頭の中が？だったのですが、見学後に「アコヤ貝」であると理解しました。その後、近くのカフェテリアで一杯ご一緒させていただいたのですが、その時は、舞い上がっていたせいか、何を話したのか思い出せません。

それから嶋田先生の話で覚えているのが、「日本にはよい集合住宅がない」という言葉です。建築家がそれを残せていない、という主旨だと思います。今、岡村さんに送られたメッセージを拝見し、先生はそれをつくりたかった、残したかったのだなと、本当の主旨を知るに至りました。

ひるがえって私も、先生とは比べ物になりませんが、仕事でよいものを残せているか、と自問します。そして事後報告になりますが、5 年ほど前にふつうのマンションを購入し、暮らしています。先生が設計したマンションに住めれば最高でした。これから先、実際に仕事でご一緒することはできませんが、残していただいたメッセージを忘れずに、気持ちの上で JV させていただけるように、なれればと思います。

ありがとうございました。

記入者：西崎　将　株式会社建設技術研究所

思い出シート

紫の丸首のシャツにケミカルウォッシュのＧジャンと言うラフな格好で、木漏れ日のキャンパスを颯爽と歩き、授業にやってこられた日の姿が今でも目に焼き付いています。

当時はまだ学生にはデジカメが特別なものだったので、思い出の写真は他の方にお任せしたいと思いますが、私にとって嶋田先生は学芸大学の教員陣の中で特別に思い出の深い方でした。環境・プロダクト研究室に在籍していなかった私にとっては、嶋田先生が担当されていた設計の演習授業でしか指導を受ける機会はなかったのですが、柔らかい語り口で自身の建築分野の世界観をお話しになる姿に憧れをいただいていましたし、嶋田先生のように自分の好きな建築の世界に没頭して生きてみたいと感じさせてくれました。当時、芸術学分野で学んでいた私にとって、嶋田先生は当に建築分野に足を踏み入れる契機を作って下さった方でした。

最初に「建築のとらまえ方」と言う嶋田先生の口癖のようなフレーズを聞いた時には「？」と意味していることがわからなかったのですが、青山の「塔の家」を図面と模型でトレースする課題で、粘土の塊から開口部を掘り出した不恰好な模型を見せた際に、不思議と感心してもらい嬉しかったのを覚えています。その嶋田先生とのやり取りから、人それぞれの建築を見るときの癖と言うか作法を考えるようになりました。嶋田先生に教えていただいた「建築のとらまえ方」は、その後も幾人かの建築家の元で学ぶ際の基本姿勢として染み付いていたように思います。

個別に話す機会は限られていたものの、嶋田先生のお話はどれも強く印象に残っています。確かコルゲートハウスの見学会の折に嶋田先生は自身の生き様についても語っていただいたことがあり、設計事務所を独立されて間もない頃にお子様が生まれ、仕方なく机の下に寝かしてあやしながら、設計を続けてこられたと言う若い頃の苦労話を励みに、子育てに苦悩しながら 20 年後の日々を過ごしています。大学を卒業してから海外での勤務期間も含め何回か年賀状をいただき、いつも嶋田先生の最新作を拝見しながら、いつか自分も同じように嶋田先生に作品を送りたいと思いつつ、終ぞかなうことなく現在に至っています。

いつも自然体で学生の個性を受け止めて接して下さった嶋田先生に感謝の気持ちで一杯です。

記入者：樋口貴彦　東洋大学　ライフで人学部人間環境デザイン学科

思い出シート

嶋田先生といえば、白絹のストール、グレイッシュホワイトのボブストレート。このスタイリングが普通に似合っている人は、後にも先にも、往年の映画スター以外では見たことありません。まずは雰囲気で相手を圧倒する、感性を使う仕事する上でとても重要なことを、身をもって教えていただきました。研究室の雑多な飲み会に、必ずといっていいほど参加してくださり、いつもそのお召し物が汚れないかと密かに心配しておりました。お酒がお好きだったから？人と話すのもお好きだったから？でしょうか、どんな時も参加くださって、当時まだまだお酒に弱かった自分が悔やまれます。

生徒に何か尋ねられた時、間をとって、ちょっと違う方面からヒントのような答えをお話しくださる、柔らかいけれど鋭いお話しの仕方が、大好きでした。私の卒業制作はプロダクト系だったのですが、「作品自体のデザインがどうとかは本間先生に任せます。本人が意図したかどうかはわからないけれど、展示に奥行と透明感があって、空間表現が面白い」と、自分でも意識していなかった、卒業制作物自体ではなく展示にはある程度満足していた私を見破るようなコメントをいただき、驚いたのを覚えています。その言葉はボディブローのように効き、そういう方向の能力はちょっとあるのかも、と錯覚して選んだ会社で、20 年来楽しく働けています。人を動かす言葉、ってすごいですね。

1999 年　卒業制作講評

2013 年　伊藤先生出版記念　国際文化会館

コルゲートハウスにもお邪魔させていただく機会もあり、愛情をもってご自分の作品の良かったところや反省すべきところなどを教えていただきました。その中で、「所有者が面白いと、デザインも面白くなる、人と話しをすると、どんどん面白くなる」とおっしゃっていて、「相手をちょっとだますくらいの、はったり（話術）も必要」とお茶目にお話を展開されていたのも、新鮮で印象的でした。

嶋田先生や本間先生、松井先生、伊藤先生に大学時代教えていただいたことが、今でもふっと活きることがあります。出会えて、教えていただく機会があったこと、本当に幸せでした。嶋田先生とは本間先生のお通夜でご一緒したのが最後になってしまいましたが、どうぞ安らかに、いつか、お酒を飲みながらお話しできるのを楽しみにしています。

記入者：96 年入学　平尾清香　花王株式会社（カネボウ化粧品）

思い出シート

2021 年の年明けから 1 週間、休日の昼に差し掛かるころ、研究室の 3 羽烏の 1 人から連絡があり、久々の連絡に喜びもつかの間、嶋田先生の訃報を聞きました。

嶋田先生。ロマンスグレーの長い髪をかき上げるしぐさがとても絵になる先生だな、というのが感じた第一の印象でした。

私は研究室に入ったのが 1 年からだったため、先生との面識は長かったものの、講義を拝聴するのは 3 年生からと遅かったのですが、初めての講義の時だったでしょうか。最後に先生より質問はないかと問われ、誰も質問をしなかったところ、君たちは大変失礼だ、誠意をもって伝えている人間に疑問もなにも感じていないのか、とまっすぐに私たちを見つめて仰ったことがとても印象に残っています。

嶋田先生の眼差しはいつも優しく、でも誤魔化すことができないことが感じられ、そのことも含めてちょっと怖いな、と正直感じていました。でも、それは私たち学生と同じ目線に立って向き合ってくれる、熱意のある懐のあたたかさから来るものだとわかるようになったのは、卒業や社会生活で数年を経たころ、いわゆる人生の節目だったと思います。

卒業後、記念会を終えて一息ついていたころでした。先生より一枚の葉書をいただきました。いただいたメッセージには、会のお礼と、人生の岐路に立っているであろう私に対し、これからのことを応援していると書かれていました。

優しい先生の文字に彩られたその葉書には、前川国男氏の東京文化会館のモノクロ写真が印刷されていました。

嶋田先生、先生はその眼差しで、私の何かをその時感じ取っていたんですね。

それから 8 年の月日を経て、今、私は長く携わっていた業界のキャリアを卒業し、別の道を歩み始めました。

先生がとっても魅力的だと評価してくれた卒業制作の一環、幼児に携わる仕事がしたく、その小さな一歩を踏み出したところです（スタートラインに立ったといえるかも？笑）。

先生の眼差しを私も引き継いで、子供たちに向けていきたいと改めて感じています。

嶋田先生。

ありがとうございます。

今はただ感謝の気持ちでいっぱいです。

先生からいただいたたくさんのこと、大切にしてこれからの道を一所懸命に歩んでいきたいと思います。

記入者：98 年入学　藤田(唐澤)彩　環境・プロダクトデザイン研究室 OG

思い出シート

わたしは嶋田先生さんがカッコよくて大好きでした。学芸大の後輩たちを羨ましく思いました。私たちの時代は環境・プロダクト研究室の社会人で非常勤の講師の先生はませんでしたから。いわゆる学校の先生とはちがって実際の、今の現場の話が聞けることは貴重な財産になりますし、自分が目指そうとする世界で何をするのか具体的にイメージできます。学生は自分で調べることはできますが、どんなに優秀でも限界があります。嶋田先生はきっとすごく相談もしやすかったのではないかと思います。

わたしはたまに学校へおじゃましていたので嶋田先生と知り合うことができましたしお酒を飲みながらたくさんのことを教えて頂きました。嶋田さんの語りで覚えているのは「一級建築士の資格は足の裏についた米粒といっしょ。取っても食えない。でも取らないと気持ちが悪い」です。これを思い出して技術士の勉強を頑張ったことを思い出します。

2013.6.2　出版記念祝賀会の祝辞

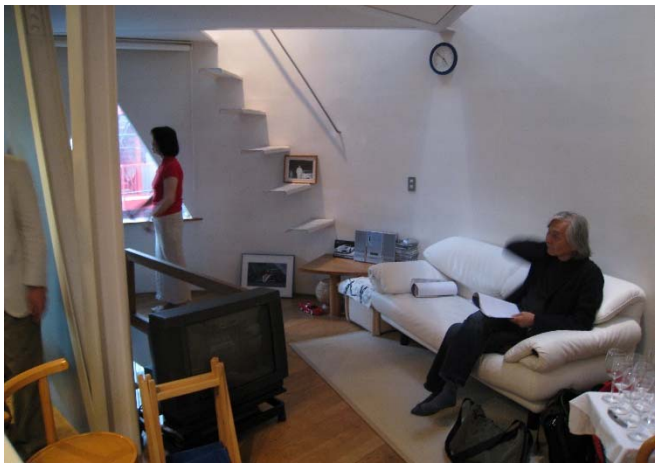
思い出の写真は３つあります。

１枚目：伊藤清忠先生の出版記念祝賀会での祝辞です。伊藤先生をディスりながら面白いお話をして頂きました。嶋田さんにしかできません。

2012.6.30　まちあるき in 平和の森公園

２枚目：まちあるき in 平和の森公園です。暑いのに黒装束。やせ我慢？かと思いましたが、カッコいいのでしかたありませんね。

３枚目：まちあるき in コルゲートハウスです。嶋田さんの作品に触れられてうれしかったです。ひとの家なのにほぼ我が家状態でくつろいでいます。あ、説明の準備か・・。



2009.9.5　まちあるき in コルゲートハウス

あちらでも美味しいお酒を飲んで私たちのことを優しい目で見守っていて下さっていると思います。笑われないようにがんばります！

ご冥福をお祈りいたします。

記入者：88 年入学　藤原正明　株式会社建設技術研究所

思い出シート

嶋田先生との交流は 1995 年、伊藤清忠先生の研究室で挨拶したときから始まりました。記憶は定かでないですが、非常勤講師の役割を、畑山さん（当時清水建設）から引き継ぎ、初めての卒業制作講評会を控えた時だったと思います。私を含めて、伊藤先生、嶋田先生、本間先生と 4 人で会話したのが最初でした。当時は、美術学科全体に、非常勤含めて、結構たくさんの、様々な分野の先生がいらっしゃって、講評会後の懇親会が、とても刺激的で楽しみだったことも思い出します。そんな時も嶋田先生はいつもおしゃれで粋でした。

その講評会で、わたしは、感じたまま、好奇心のおもむくまま、卒業生の作品を講評していましたが、嶋田先生は常に抑え気味で、物足りなく思ったのを覚えています。が、それは私の認識違いでした。私は、自分の（精神的に豊かでもない）日常の生活に照らし合わせて、これはきれいだとか、便利だとかそうではないとか論評していただけでしたが、嶋田先生は全く別の視点で作品を見られていました。日本の文化として、作品の位置を探られているような感じでした。便利とかいう判りやすい物差しでなく、もっと奥深い眼差しで学生の作品を見ておられた。と、しばらくして気付かされるのでした。その気づきの積層は時とともに分厚くなり、養分となって私を潤してくれました。私は、最上の教育を嶋田先生から授かっていたのだと、今はよくわかります。

このように、嶋田先生との交流は、時間を経るに従い、意味を持ち、豊かな思い出となって今によみがえってきます。

最初の出会いから 25 年。少しは成長した、かも知れない私を見て欲しかった。お話ししたかった。そして、まだまだですね、なんてにこやかに言って欲しかった。　今、数年前の賀状の言葉がよみがえります。「そろそろお会いしたいですね」．．．嗚呼、でも時は戻りません．．．謹んでご冥福をお祈りします。

2013.6.2　国際文化会館にて
伊藤先生出版記念パーティー前の一コマ

2013.7.25　恵比寿にて
左側奥から、松井、嶋田、唐澤
右側奥から、後藤、八重樫、岡村

記入者：松井幹雄　大日本コンサルタント株式会社

思い出シート

「嶋田先生、ゆっくりお休みください。」

2016 年になったばかりのまだ寒さが厳しい 1月、嶋田先生と同じ頃に学芸大学の講師であった本間先生の突然の訃報がありました。一番若い先生の突然の訃報に驚き、その通夜に出席した折、嶋田先生や、伊藤清忠先生の姿もありました。それが嶋田先生とお会いした最後の機会になりました。先生方のほか、学芸大の OB,OG も何人か来られており、帰りに近くの居酒屋に寄って話をした記憶があります。

「一番若い人が先に亡くなるなんて…」と、嶋田先生はとても残念がっていたように思います。最近はあまりお会いする機会はありませんでしたが、在学時や卒業後も何度も楽しいお酒の席を共にさせていただいた事が思い出されます。田町にある、ご自身で設計された建物に入っているとんかつ屋さんでごちそうになったこともありました。事務所がある泉岳寺近くの行きつけのバーで一緒にワインを頂いたこともありました。毎回、建築の話からだいたい人生の話？になっていったように記憶しています。嶋田先生はいくら飲んでも顔色が全く変わらないので、強いな、といつも感心していました。

私が大学院に進むことになったと年賀状で報告をした時も、「これからが本当の勉強です。僕もやります！」と嶋田先生らしい返事をいただいたことを良く覚えています。
そのような中でご指導いただいたことは、忘れません。ありがとうございました。

1999.2　卒業制作講評の様子

記入者：95 年入学　水城大雄　水城環境デザイン事務所

思い出シート

嶋田先生が着任された時は、わたしが既に大学 4 年生になる時だったため、嶋田先生の講義を直接受けたことはありませんが、卒業制作講評会がわたしにとって最初で最後の先生と学生という立場での講評だったと思います。幸いなことに何を言われたかまでは覚えていませんが…笑。

残念ながら、当時の写真等は全く残っていないので思い出話しかありませんが、当時は伊藤清忠先生の仕切り、現役生主催で、学祭などの節目に必ず卒業生を大学に招いての宴の会を開催していたので、現役時代、そして卒業した後もしばらくは定期的に大学に顔を出す機会があり、嶋田先生ともいろいろな話をさせていただきました。中でも初めての飲み会の席で、嶋田先生が「学生はさ、何の責任もないんだから、課題に対して何の制約も感じず自由な発想をしてもらいたいんだよね。建築家とかデザイナーってやっぱりその自由な発想と制約とのせめぎ合いなんだから、学生には制約や既成概念に囚われず突拍子もないものを発想してほしいのさ。柱が 1 本もない建築だっていいじゃん。宙に浮いてる建築だっていいじゃん。実現できるできないは関係ないんだよ。ねー、美濃部さん。」と、わたしに熱く語られたことがありました。良い意味でわたしたちに乱暴に語り掛ける（＝とても気さくな）姿がとても新鮮で、強く記憶に残っているのだと思います。

毎回、飲み会のときにわたしが下戸のことを説明するたび、「何で飲めないのさー！人生半分以上損してるよ。」と叱られたあの笑顔と語り口調はどの世界でも変わらずのことと思います。今度お会いした際は、きっとわたしもお酒をお付き合いできるようになっていると思うので是非お誘いください。ご冥福をお祈り申し上げます。

記入者：92 年入学　美濃部順一郎　株式会社長大

思い出シート

まだエアコンもなく蒸し暑い教室に颯爽と現れ、凛とした姿で授業をされていた事が印象的でした。

自分は建築志望ではありませんでしたが、1年次から研究室に在籍していた事もあり、他の諸先輩方と同様に扱ってくださったのは厳しくもあり、またとてもありがたい事でした。笑顔の中でも眼光鋭い眼差しで講評をして頂いたのが記憶に残っております。

「断面で考えなさい」

これは今でも自分がモノ作りに携わる中で礎にもなっているとても大事にしている言葉です。「建築は体で感じるもの。自分がその空間に立って考えなさい」と。建築にあらずともモノづくりの中ではその構成や成り立ち、他の部品との関係性…、どこを切り取り、何を切り取るのか。イメージを空間的にとらまえる基本的な考え方は今でも忠実に守っています。

「響」

先生にごちそうして頂いた響。忘れられない味です。今でも「忠実に」守ってしまっています…。イベントの帰りに立ち寄ったBarで「次は何飲むの？」「『響』頼んでも良いですか？」「響？何それ？飲んだことない。じゃあそれ2つ！」「お〜。これうまいねぇ。」学生時分にはまだまだ早いお酒でしたが、良い勉強をさせて頂けました。

もう一度先生とグラスを傾けたかったです。

品川の駅付近で偶然にも3回ほどお会いましたが、その際も短い時間でしたが変わらぬお姿でお話できたことを覚えています。「また飲みに行こうね。」

どんな席でも優しく熱くそして対等にお話ししてくださる姿が甦って来ます。

今もゆっくりと優しい笑顔を浮かべながら飲んでいるのかな。品川辺りで見かけられたらお声がけできればと思います。献杯。

記入者：96入学　渡辺貴宜　市光工業株式会社

嶋田さんからのフォトメッセージへの返事

ここに岡村さんが長年メール発信を続けている「フォトメッセージ」に対し、嶋田から届いた返事の一部を掲載させていただきました。

フォトメッセージ 90
日比谷通り

旧 31 メートル規制は若い頃全部の建物を同じ高さにそろえば美観が保てるのか？と疑問をもった時期がありました。大阪は御堂筋に面して規制がかかっていました。丸の内にしても御堂筋にしてもいま思えば良かったですね、経済効率からすればきせいの緩和がやむを得ないところもありますが、規制中はなにがなんでも駄目　！一方規制がはずれたらみんな自由？という行政は日本独特のようですね、丸の内や御堂筋は少なくとも重要な区画はそのまま残すべきではないでしょうか？
その区画は税制でバランスをとらなければならないですが。　　嶋田勝志

On 2010/11/29, at 10:24, 岡村幸二 wrote:

歴史の一片でも可能な限り保存してゆくのが私達の次代への責任の一端であり大事なことですね。

フォトメッセージ 138
道の真ん中にケヤキの大樹

さて建築見学とその街並を歩く会ですが、前回は内井昭蔵さんの当時の意欲を実感しました。さらに菊竹さんの偉さも知ることが出来て僕にとっては非常に刺激的でした。

次回は少し方向を変えて　吉田五十八さんを見たいと思います。僕の見学系図からすると少しずれますが、日本の現代建築を語るには避けて通ると何か置き忘れてしまうと思います。吉田五十八の作品は現存するものが少なく一つ世田谷の成城に　猪俣邸というのがあります。そこで　猪俣邸と成城を歩く　にしたいと思います。

成城はいろんな人の思いもあるかとおもいます、よって参加者の方々の知っているものを見る提案も期待したいと思います。　　嶋田勝志

On 2011/10/17, at 12:52, 岡村幸二 wrote:

＜フォトメッセージへの返事 1/3＞

ヨーロッパの都市は新旧の融合がうまいですね！　それには石造やレンガ造など構造体がしっかりしているという条件がありますね。東京駅はそういう意味では同条件ですが、　耐震補強や免震構造へと大げさにならざるを得ないのですが！先日品川駅近くにある三菱開東閣（元伊藤博文が所有地に　岩崎家が購入し岩崎弥之助が別邸としてつくったそうです）　一般公開していませんが観るチャンスがありました。　ジョサイア　コンドル設計です。　戦中近くに落下した爆弾や焼夷弾の油が外壁にシミとして残っています。　僕はあまり気になりませんでしたが、戦争の負の遺産？　写真にすると非常に汚く写るそうです。今年中にはきれいにお化粧直しをするそうです。また耐震免震工事も済んでいるようです。それらの費用は三菱グループ「金曜会」で決められ、その下部組織が 3 回くらいの会議でグループ企業の規模に応じて寄付金が決定されるそうです。

フォトメッセージ 219 号
サン・ラザール駅

お金があるところはいいですね？　　嶋田勝志

On 2013/05/27, at 12:03, 岡村幸二 wrote:

素敵な集合住宅ですね！　　僕はいつか岡村さんに日本では集合住宅は育たないと言ったことがあるとおもいます。ベルシー地区の集合住宅　素敵です。　ヨーロッパには魅力的な集合住宅が現代も（過去も）レベルの高い集合住宅が出来ています。

残念ながら我が国ではますます建築家が集合住宅を手がけることが出来なくなっています。それは住宅公団がなくなって、民間の不動産会社主体の世界になっているからです。

いまや建築家が参加できる場面は、ファサード（これを通常デザインと言っている）をいじるぐらいです。　それも不動産会社の下請けとして！僕は絶対やりません。

フォトメッセージ 239 号
パリ・ベルシー

ちなみに市営住宅や県営住宅は 50 年前と同じ感覚でつくります。ヨーロッパでは公営住宅こそ先進の住宅をつくります。それに建築家が参加します。　多くはコンペにより建築家が選出される。

ヨーロッパの集合住宅のかっこいい要素はその住戸の大きさが日本とは比較にならないくらい大きいです、これは外観を豊かにさせます。

ああ集合住宅創りたいな～　　嶋田勝志

On 2013/10/15, at 13:25, 岡村幸二 wrote:　　＜フォトメッセージへの返事 2/3＞

ご無沙汰しています。　きっと何をしている！　と訝っておられたことと思います。

実は４月１日（平成より令和になる時）より入院しました。　ひょんなことから胃がんその他が（癌の別種）が見つかり手術その他の治療をしてもらっていました。

入院中は当然ながら！退院後が大変でした。　薬害（特に抗癌剤）の副作用らしく担当医は治療当初から分かっていたようですが！（家族にも説明していた！）現実の当人としてはいくら説明されていてもその納得できるものではありませんでした。　身体がだるい　力が湧かない　何もしたくない　社会復帰したくない？（本当はしなければならない！）退院当初は体重がガタ減り、筋肉が削がれ、死人に近い？肌の色！　ともかく何もしたくない！でした。

フォトメッセージ 443 号
猪名川大橋

パソコンに向かうのが厭です、パソコンは社会の窓口です。　特にメールを開くのが厭！

最近やっとそれも克服出そうな気持ちになりました。　岡村さんには本当に無礼をしてしまいました。

和泉川親水広場　古河公方公園田植え他が特に好きです。　今後もよろしくお願いいたします。

2019 年 8 月 30 日　嶋田勝志

以　上

＜フォトメッセージへの返事 3/3＞

朝日新聞：論壇　1998(平成 10 年).5.7

論壇

土木デザインにも著作権を

嶋田　勝志

「シビックデザイナー」という仕事をご存じだろうか。道路や橋といった、公共土木施設のデザイナーである。

「土建国家」と自嘲する声もある日本は、社会資本整備費の国内総生産に対する比率が先進国でも飛び抜けて高い。経済協力開発機構によると、近年では米国の四倍、英、独の三倍にのぼっている。それだけのお金が公共土木に集まるのに、そのデザイン現場に人材が集まらないのが日本の著しい特徴だ。身の回りのデザインには気を配る私たちだが、大金を使う場所に専門職のシビックデザイナーを持っていない。私は、建築家、環境デザイナー、大学でのデザイン教育者という三つの立場から、土木デザインの現状と今後への提案を述べたい。

土木の現場を眺めてみると、巨大プロジェクトの場合は、エンジニア主導でそれなりの成果があがっている例もある。風洞実験などを繰り返し、シェイプアップができているようなケースだ。歩行者の目から遠いことも幸いしている。だが、最も人材が必要とされるのは、歩く人間の目に近い、中型から小型のプロジェクトだ。好みや趣味による素人判断や、脈絡を無視した外国のものまねなどは、訓練された専門のデザイナーの不在が招いた結果だ。

そもそも、日本の公共土木の設計者は、いかなる著作権も認められていない。その裏返しとして、基本的に責任もない。デザインは発注者の買い取り感覚で、採用も変更も自由裁量だ。発注者から委託され、設計をまとめる窓口が建設コンサルタントだ。そして、計画や基本設計など段階ごとにコンサルタント会社が代わる。それが、いつ代えられるかもはっきりしない。設計者と工事監理者が分離されるので、設計者が完成まで見守ることはできない。こういう世界に人材が集まるだろうか。機会均等の精神そのものは否定しないが、段階ごとに会社を代えるような方式では良い意味での競争が起こらず、参加者の能力を引き出せない。その結果、全体の成績も上がりにくくなる。

だが、専門家が正当な評価を受ければ、その魅力に人材が集まってくる。欧州には、デザインまでこなしてしまうスーパーエンジニアの伝統がある。現代では、スペインで建築を、スイスでエンジニアリングを学んだサンティアゴ・カラトラバが一連の橋で評価を受けている。また、スイスの高速道路N2は、建築家リノ・タミが、全体景観をまとめるコンサルタントとして迎えられ、成功した例だ。最近のロンドンの運河の歩行者用ブリッジは、エンジニア主導のコンペと、建築家主導のコンペの両アプローチを試みた例だ。日本にも、デザインをこなすエンジニアの伝統はあった。土木では、肥後の石工がその好例だ。熊本の通潤橋は江戸後期土木の最高傑作といわれる。藩主の発案と伝えられる岩国の錦帯橋は世界的にも珍しい木造アーチで、持ち送りの立体構造になっている。それ以後も、昭和初期までは土木の技術とデザインの間に、現在ほどの距離はなかった。だが、戦後の高度成長に伴い、技術とデザインが分断され、デザインは置き去りにされてしまった。

これに対し、建設省は土木デザインへの認識の高まりに対応して、一九九一年にシビックデザイン導入手法検討委員会を組織している。この流れの中、公共土木施設の全体景観に、シビックデザイナーがかかわる例も出てきた。ダムなどの全体景観の監修に、一人のデザイナーが長期にわたってかかわるのは画期的と言える。しかし、監修といっても、一般に想像されるほど正式な立場とは言い難いのが残念だ。

専門家の力を発揮させるには、個々のチームの責任を明確にして、透明性を高めることだ。そのためには、計画の最初の段階から工事監理までを、一つのデザインチームに責任をもってみさせることだ。機会を公平で透明なものにするためには、コンペが有効かと思われる。そして、専門家を正当に評価するには、デザイン料と著作権の位置付けを明らかにすることだ。両者はコインの裏表で、片方を制度化すれば、残りも解決する。まずできそうなことから思いきって始めよう。

（建築家・環境デザイナー、東京都在住＝投稿）

嶋田先生を偲ぶ会　（オンライン）

日時：2021 年 2 月 27 日 19:30 開始（一次会）

嶋田先生を偲ぶ会を上記日程で開催させていただきました。ここに報告させて頂きます。

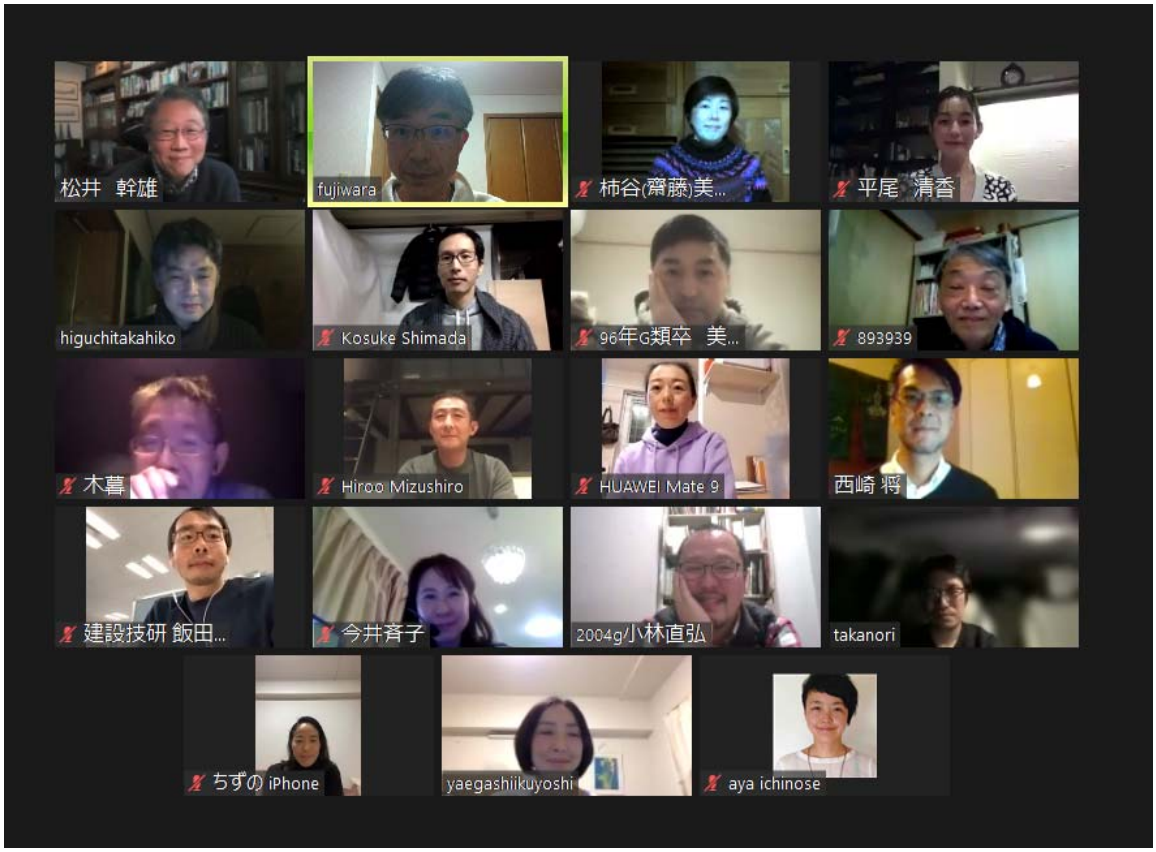
嶋田先生が非常勤講師当時の同窓生、お仕事でお世話になった方々に参加していただきました。粋でダンディーだった先生の在りし日の思い出を皆で共有。ご子息からもお話を伺うことも出来、先生の反骨精神の源を再発見できたり、学年を越えた同窓同士が顔を合わせたり、先生を媒介に新しい繋がりも生まれる機会になりました。ありがとうございました。

そろそろお会いして「まだまだですね」なんて声をかけてもらおうと思っていたのですが・・・ご冥福をお祈りいたします。

思い出にオンライン画面のキャプチャを掲載させていただきました。撮った後にご参加いただいた方もいらっしゃいましたが、ご了承ください。

（尚、本文は 2021.3.5 に松井幹雄さまより配信されたメール文(一部改)を拝借させていただきました。

責：藤原正明）



思い出写真集

2011.1.8 まちあるき自由学園明日館にて

2012.11.23 研究室にて

2012.7.13 伊藤先生祝賀会の準備会

2013.6.2 伊藤先生祝賀会にて 1

2013.6.2 伊藤先生祝賀会にて 2

2013.6.2 伊藤先生祝賀会にて 3
左は伊藤先生の奥様

～ご遺族からの一言～

父が病院のベッドでこんな話をしていました。この機会に記しておけることありがたく思います。

吉阪隆正さんは「早稲田色を取り戻さなくてはならない」と遺言に書いて鈴木恂さんを自分の後任に指名したそうです。鈴木さんは 10 年かけて当時は専門学校として下に見られていた早稲田大学芸術学校を、早稲田大学の建築学科と同等にしたのだそうです。大阪の専門学校を出て建築家になった父は、鈴木さんの保守的でない姿勢をリスペクトしていたように思います。同時代、言いなり建築家が増える中、抜擢された鈴木さんのことを、権威主義者たちに立ち向かうヒーロー建築家のように語っていました。父はいつも「施工者と仲良くなるな」と言っていましたので、私には時に不思議なほど頑固にうつりましたが、この話は父の気持ちを知るヒントだったように思います。

さて、正月に逝く 2 週間前には、自分で設計した住宅（コルゲートハウス）のクリスマス会で美味しいワインもいただきました。父はこの家の危なっかしい階段を設計した時に「住宅には緊張感が必要」とか何とか言ったそうですが、2 年前のクリスマス会では酔っ払ってその階段で転んで意識を失っています（笑）最後に訪れた時には介助なしに階段を登れませんでしたが、こうやって好きな人と好きな建築と関わることができた父の最期は幸運に思います。岡村さんにも町歩きや勉強会で「楽しい思い出ばかり」と言っていただいたのですが、つまり父にとっても同じだったんだろうと想像し感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございます。

嶋田耕介

コルゲートハウス(右)
危なっかしい階段(下)

生徒さんのどなたかが描いたとか
言っていたような気がします。
本人お気に入りでずっとデスクの
傍の壁に貼ってあった絵です(笑)

m e m o